

六勝寺の成立について

平岡定海

一、六勝寺の成立

六勝寺とは、まづ白河天皇が御願寺として承暦元年（一〇七七）十二月十八日に供養を行われた法勝寺と、堀河天皇が法勝寺の西に康和四年（一一〇二）七月廿一日に建立されて供養された尊勝寺、さらには鳥羽天皇が元永元年（一一一八）十二月十七日に法勝寺の東に建立された最勝寺および大治三年（一一二八）三月十三日に待賢門院璋子によって建立された円勝寺、そしてまた崇徳天皇により保延五年（一一三九）十月二十六日に供養を遂げられた成勝寺、さらには近衛天皇が久安五年（一一四九）に建立された延勝寺を指す。そして、その寺々にはそれぞれ「勝」の寺名を附したことからそのように称された。⁽¹⁾

しかしこれを分類すると天皇の御願寺が五ヶ寺、女院の御願寺が一ヶ寺となっているが、女院の御願寺は美福門院の歎喜光院、八条院の蓮華心院、殷富門院の蓮華光院等の院号を付した寺院が多いのに対して、待賢門院の御願寺のみが六勝寺の中に組みこまれている。それは待賢門院が崇徳天皇の国母であったという理由から、天皇の御願寺と同格にあつかわれた結果からである。

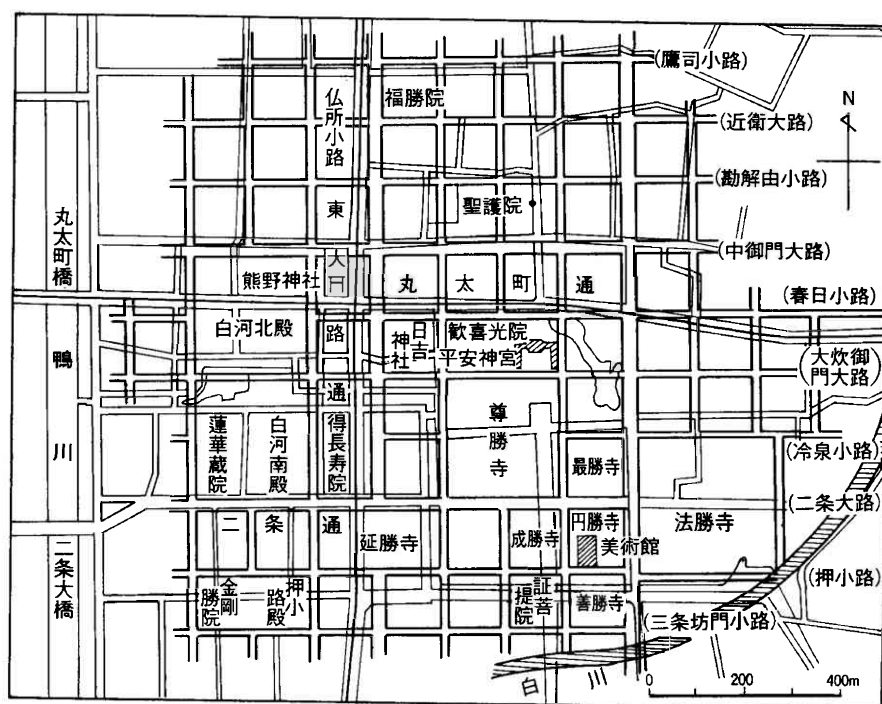
この六勝寺の成立の時期について考えてみると、法勝寺は白河天皇の即位後六年、尊勝寺は堀河天皇の即位後十七年、また白河院政が初まってより十七年、さらに最勝寺は鳥羽天皇の即位後十二年で白河院政後二十七年、円勝寺は待賢門院の院号宣下ののち五年、白河院政後四十三年、成勝寺は崇徳天皇の即位後十七年で鳥羽院政後十一年、延勝寺は近衛天皇即位後九年、鳥羽院政後二十七年である。このように六勝寺のうち、法勝寺を別にして尊勝・最勝・円勝の三寺は白河院政を背景として、また成勝・延勝の二寺は鳥羽院政を背景に成立したのであった。

もちろん六勝寺はそれぞれの天皇の新御願寺として成立しているのであって、院の御願寺ではない。このことについてはさらにのちに述べた

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

い。つぎに六勝寺の特徴としてその寺域が散在的でなく、これらの寺院が白河御堂とか、白河御願寺と称される如く白河の周辺に集まっている。⁽²⁾ いまこの寺域からすると最も広大なのは法勝寺で、ついで尊勝寺、さらに最勝・円勝・成勝・延勝とつづくが、最勝、円勝、成勝の三寺は方一町の小規模の寺院で、尊勝、延勝は二町と一町の短形状の寺院である。



六勝寺辺り 白河一帯の院政期諸寺の位置を示したもの 杉山信三氏の復元原

この六勝寺の成立と規模については次に別表をかかげた。
この別表について考えてみると、法勝寺は金堂、講堂、阿弥陀堂、五大堂、法華堂、南大門、鐘樓、経蔵、廻廊、僧房、九重塔、薬師堂、八角円堂、常行堂、曼荼羅堂、小塔院を具えた完成された規模の大きい伽藍であってそれは暦応五年（一三四五）の法勝寺災上るときまで変転をくりかえしながらその伽藍の規模を維持していた。⁽³⁾

しかし法勝寺以外の他の五寺は法勝寺より規模が小さく、まず講堂が存在しない。けれども五大堂、阿弥陀堂は存在したようで、薬師堂は尊勝・円勝・最勝寺に、観音堂は尊勝・成勝寺に、曼荼羅堂は法勝・尊勝寺に、その他小堂は各寺にあったが、やはり六勝寺の基本としたまた最も重視すべきものは何といっても法勝寺である。

しかしこの法勝寺の成立については、私は法成寺と関聯なしには考察できないのであって、このことを次に述べてみたい。

(1) 御料地史稿第三章一〇四頁

(2) 六勝寺の位置については西田直二郎著「京都史蹟の研究」の中に法勝寺遺跡としての論考あり、位置については西田博士は実地研究の結果を詳細に発表され、福山敏男氏は日本建築史研究のなかで六勝寺の位置について江戸時代の地誌類の誤りを指摘して、これまたくわしく述べられているので、位置についてはこれらの著書を参照されたい

六勝寺の成立について

| 伽藍 | 法勝寺 | 尊勝寺 | 最勝寺 | 圓勝寺 | 成勝寺 | 延勝寺 |
|-------------------|--|--|--|---|----------------------------------|-----------------------------------|
| 金堂 | 七間四面瓦葺 一字 金色毗盧舍那如来(三丈二尺) (胎藏界大日如来)蓮弁百体化 仏アリ、光背十六化仏アリ 金色宝幢如来、花開敷如来、無量 寿如来、天鼓雷音如来(各二丈) 光背化仏十二体 緑色六天(梵天・帝釈天等)(各 九尺)〔胎藏界四仏〕毗盧盧像 (八尺)四天王(八尺) 〔高階為家〕〔承暦 1.12.18〕 | 金堂 〔康和4.7.21〕 | 金堂 〔元永 1.12.17〕 | 金堂 大日如来(二丈) 四仏(丈六) 両界曼荼羅 四天王(七尺) (大治 3.3.13) | 金堂 (保延 5.12.26) (平安遺文5088) | 金堂 (七間四面) 平忠盛 (久安5.3.20) |
| 講堂 | 七間四面瓦葺 一字 金色 釈迦如来(二丈)諸佛十三体 普賢菩薩(丈六)文殊菩薩(丈六) 〔高階為家〕〔承暦 1.12.18〕 | 講堂 〔康和4.7.21〕 | | | | |
| 阿弥陀堂 | 十一間四面瓦葺 一字 金色 阿弥陀如来(丈六)九体 觀世音菩薩、勢至菩薩(一丈) 緑色 四天王像 各一休(六尺) 〔藤原頼綱〕〔承保 3.12.18〕 | 九体阿弥陀如来 (康和5.7.5)(丈六) 阿弥陀堂 〔長治 2.12.19〕 〔高階為家〕 | 五大堂 〔元永 1.12.17〕 | | | 阿弥陀堂 阿弥陀如来 九体 |
| 五大堂 | 五間四面瓦葺 一字 緑色 不動明王(二丈六尺) 降三世・軍荼利・大威徳・金剛 夜叉明王(丈六) 〔藤原良綱〕〔承保 3.12.18〕 | 五大堂 〔康和4.7.21〕 | 五大堂 〔元永 1.12.17〕 〔大治 5.12.26 再建〕 〔紀伊守公望〕 | 五大堂 五間四面 | 五大堂 (平安遺文5098) | |
| 法華堂 | 一間四面 七宝多宝塔一基(金泥法華經一部 八卷納入) 〔藤原仲実〕〔承保 3.12.18〕 | 法華堂 〔長治 2.12.19〕 | | | | |
| 南大門 | 五間四面二階瓦葺 金剛力士 二丈 〔高階為家〕〔承保 3.12.18〕 | 南大門 〔康和4.7.21〕 | 南門 | | | 南大門 |
| 鐘樓 | 〔高階為家〕〔承保 3.12.18〕 | 鐘樓 〔康和 4.7.21〕 | | 鐘樓 | 鐘樓 〔保延 5.12.26〕 | 鐘樓 |
| 経蔵 | 〔高階為家〕〔承保 3.1218〕 | 経蔵 〔康和 4.7.21〕 | | | 経蔵 | 経蔵 |
| 東西軒廊及 廻廊 | 八十六間 〔高階為家〕〔承保3.12.18〕 | 東西軒廊、廻廊 〔康和 4.7.21〕 | 東西廊 〔元永 1.12.17〕 | | 廻廊 | 軒廊、廻廊 〔久安 5.3.20〕 |
| 釣殿御所 | | | | | | |
| 僧房 西大門、北 大門 | 〔承保 3.12.18〕 | 東大門、中門 〔康和 4.7.21〕 | | 二階門 | 南大門 四門 (東西南北) | 南大門 東、北、西大門 〔久安 5.3.20〕 |
| 九重塔 | 八角九重塔 八十四丈 金剛界五智如来(大日・阿闍・ 宝生・阿弥陀・不空成就) 金剛界九会曼荼羅 (八尺)〔永保 3.10.1〕 | 東塔、西塔 (五重塔) 〔康和 4.7.21〕 | | 東塔(三重塔) 中塔(五重塔) 西塔(三重塔) 〔大治 2.3.19〕 | | 塔 |
| 薬師堂 | 金色薬師如来(七仏薬師)七体 (丈六)日光・月光菩薩(丈六) 〔永保3.10.1〕 | 薬師堂 〔康和 4.7.21〕 | 薬師堂 | 薬師堂 九間薬師如来 (七仏) | 観音堂 (平安遺文5098) | |
| 八角堂 | 円堂 愛染明王(三尺)白檀 〔永保3.10.1〕 | 灌頂堂 〔康和 4.7.21〕 | | | | |
| 常行堂 | 等身阿弥陀仏、脇侍四菩薩(三尺) 〔応徳2.8.29〕 | 観音堂丈六観音 | | 六時堂 | | |
| 曼荼羅堂 | 北斗曼荼羅木像 〔天仁9.10.27〕 | 曼荼羅堂 〔康和 4.7.21〕 | | | | |
| 小塔院 | 土塔 二十六万三千基 円塔 十八万三千六百卅七基 〔保安3.4.23〕 | 准提堂 〔長治 2.12.19〕 | | | 惣社 (平安遺文5098) | 一字金輪堂 〔久安 5.3.20〕 |

六勝寺の成立について

(3) 西田直二郎著「京都史蹟の研究」法勝寺遺址についての「中院一位記」の引用に、その法勝寺の伽藍の曆応大災の状況を詳細に記している。いま、西田博士の引用された史料を記すると次の如くである。

注進 去廿日法勝寺回祿間事

一、金 堂 付左右廻廊鐘樓經藏等

中尊胎藏界大日如來并脇士釋迦像令失畢、但中尊佛光頂上多寶塔中御本尊二體并同左右御手同御膝等者奉取出之畢、藥師寶生彌量壽佛并僧形文殊一體梵天帝尺四天王像等者奉取出_{云々}、但大略破損歟、

一、講 堂

金剛界釋迦三尊 皆悉奉取出之畢但破損、

中尊御胸内金泥眞言陀羅尼御體小奉取出之等、

一、阿彌陀堂

本尊九體丈六阿彌陀像内一體并多聞持國廣目天等者奉取之畢、自余尊像悉燒失畢、

一、九重塔婆

本尊大日如來四體并四佛四天等悉奉取出之畢、梵字御鏡一面同奉取出之畢、

一、鎮守惣社

一、南 大門 金剛力士并額等同燒失畢、

一、同脇門二字

一、阿彌陀堂二字 西面

一、平 牆

一、南面并西門已南築垣、

已上成灰燼畢、

一、五大堂 但本尊等欲取出之間破損畢、

一、法華堂

一、北斗堂

一、藥師堂 但本尊欲奉取出之間散々破損畢、

一、圓堂 付門二字築垣、

一、常行堂 并御所、

一、西門并五大堂門

一、同已北築垣并北門三字

一、前池反橋

已上免火難無爲也、

一、塔堂一字自元顛倒

一、今度寺家沙汰

金堂講堂阿彌陀堂塔婆等 付南大門 本尊燒跡檜垣構之炎上跡、金物洪鐘之破、塔婆九輪寶鐸以下等取置常行堂御所内、已下員數不可勝計
右大概加實檢注進如件

曆應五年三月廿八日

〔中院一位記〕

二、法勝寺と法成寺

法勝寺は白河天皇の即位後五年にして建立され、宇多天皇の即位後二年にして建てられた仁和寺や、後三条天皇の即位後三年にして建てられた円宗寺について早期建立の例に属する。法成寺の場合、藤原道長の摂政後六年（出家後三年）に比べても早い。そして寺院の規模は御願寺の六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

中でも最大といわれている。

その木作始は承保二年（一〇七五）七月十一日で、第一期として承保三年（一〇七六）十二月十八日に阿弥陀堂がまづ供養され、合せて、五
大堂、法華堂、鐘楼、経蔵、廻廊寺が建てられた。その間わづか一年であった。また第二期の金堂はまた一年たつて承暦元年（一〇七七）十二
月十八日に供養され、ここに金堂、講堂という主要なる建物が建てられて、そののち六年後に九重塔、八角円堂が落慶して、つづいて応徳元年
（一〇八四）に常行堂が完成して、大略十年で伽藍の完成を見ている。

これに対して法成寺は寛仁三年（一〇一九）道長出家後翌年直ちに無量寿院（阿弥陀堂）の建立が始まり供養している。その間一年に満たな
い。そして次の年に西北院を供養しつづいて金堂を並行して工事を始め一年後の治安二年（一〇二二）には早くも金堂、五大堂、法華三昧堂を
供養した。薬師堂は金堂のあと二年後、釈迦堂、十斎堂は金堂のあと五年たつて建てられ、約九年を経て建立していることは法勝寺と大差のな
い速度であつて、

法成寺⇨無量寿院⇨西北院⇨金堂・五大堂・法華三昧堂⇨薬師堂⇨十斎堂・釈迦堂

法勝寺⇨阿弥陀堂・五大堂・法華堂⇨金堂・講堂⇨九重塔・薬師堂・八角円堂

と順序は異っているがともに阿弥陀堂より始まって、つづいて金堂への工事が進められている。法成寺の場合は、先に述べた如く、寛仁三年
（一〇一九）より道長の専権の犠牲となられた三条天皇の怨霊に悩まされた道長が、自分も三条天皇の失明と同様に胸を病み、眼力を失つてく
ることに對する恐怖とおののきが法成寺無量寿院の建立につながった。⁽¹⁾

しかし法勝寺の阿弥陀堂は道長のような終末的な性格でなく、白河法皇にしても、鳥羽法皇にしてもここが崩御の場所でなく「修常行三昧
之業、為往生九品之縁」⁽²⁾の道場であつて、ことに白河法皇については待賢門院が追善願文で述べている如く「帝混曼陀曼殊之粧暮鳥聲々、
更和念佛念法之唱辨説如流」⁽³⁾とて、阿弥陀院は御念仏の道場である。ここに法成寺と共通する法勝寺の性格が見られるのであつて、法勝寺
は天皇の御願寺である以上、公的な法会の道場としての性格はより強く、そのためにむしろそこで崩御されることは死を忌む立場よりしてでき
なかつた点道長と異っている。そしてその堂は四十九日の追善法要を盛大におこなう場所となつてゐる。ことに白河天皇の寺院建立の意志は極
めて強く六条御堂の発願に際しても、「世漸及澆季雖屬末法不可改我此願遠可期三會曉我速證九品天眼監之我暫留三有怨念

罰^レ之。何世聖君。非^ニ我後裔。誰家賢臣。非^ニ我舊僕。一事一言。違^レ之背^レ之。國主皇帝。殊可^レ加^ニ炳誠^一矣。仍留^ニ手痕^一而表^レ信⁽⁴⁾。」と天皇の意志は末法の燒季においてこそ佛寺を建立して、その中に九品往生を求める阿弥陀堂と怨念を罰する五大堂を建立し、国主皇帝にふさわしい法勝寺建立を計画されたのであって、そのためにも法成寺とは規模を異にするのは当然であった。

いま法成寺と法勝寺の対比を考えてゆくと、法成寺については藤原道長の法成寺供養願文及び咒願文にもとづき、法勝寺に於ては白河法皇八幡一切経供養願文を中心に考察する必要がある。

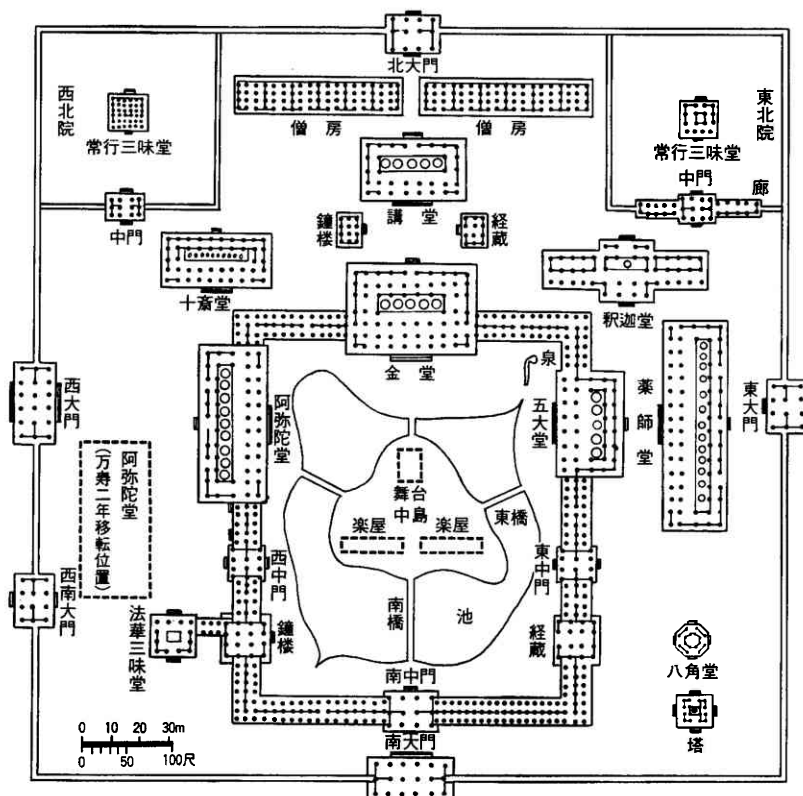
法成寺の道長の場合は滅罪生善、往生極楽のために一精舎を建立し、自分は帝王儲皇の祖であるといっても、それらの方々の没後の菩提を葬っていない。道長は法成寺を建て、金堂の柱に両界曼荼羅を画き、扉毎に八相成道変を画いて、三丈二尺の金色大日如来を中心とし、さらに二丈の釈迦、薬師如来と文殊・弥勒菩薩を安置し、梵天・帝釈天、四天王を配しているが、その目的は「佛法を住持して国家を鎮護するためであった。」これに対して法勝寺金堂の場合は本尊大日如来は法成寺と同じ三丈二尺でただ法成寺の四仏に対して胎藏界の四仏を安置して、ここで「胎藏の深理を尋ね、供養の行法を修している。その両寺の諸堂について、いま福山氏の法勝寺伽藍図と法成寺伽藍図を対称して考えてみると、

法成寺は金堂の左右に五大堂、阿弥陀堂を配しているのに対して、法勝寺は五大堂、を中心よりはづして、法成寺で五大堂のあとにあった薬師堂を、法勝寺は講堂のあとにつけて伽藍の乱立をさけて法成寺より整然と配列し直している。また法成寺では中島が雅楽を奏する貴族趣味であったのを排して堂々と九重塔を建てあげていて、ここにも法成寺の伽藍配置を継承しつつも官寺的な性格と威厳を高めようとつとめている。

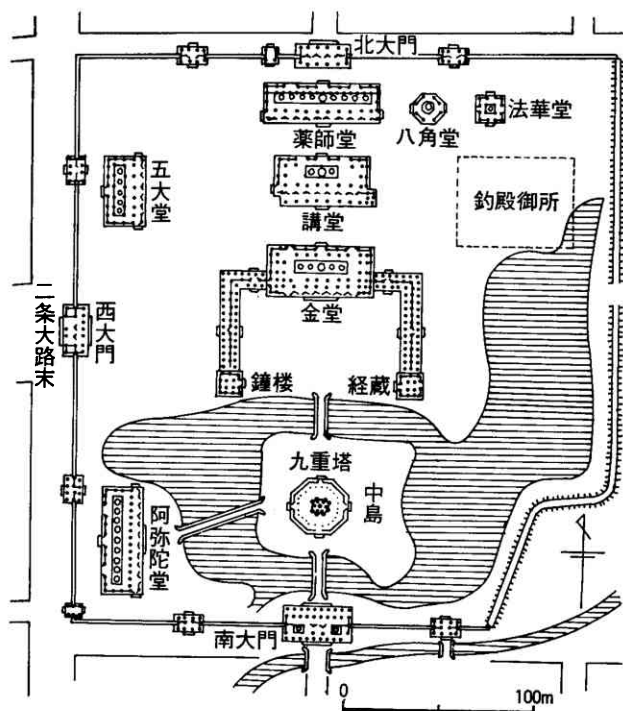
また講堂の存在については法成寺は明確でない。法勝寺では釈迦、普賢文殊を安置して毎年十月諸宗の学侶を請うて五部大乘経（華嚴経・大集経・大品般若経・法華経・涅槃経）を講じ、また一切経を転読する道場とした。そしてこの諸宗の学侶を請うることにより法勝寺大乘会は円宗寺法華会、円宗寺最勝会と合して天台三會と称して台宗の学侶の登龍門として南都の方の興福寺維摩会等に対した。また天承元年（一一三二）七月七日には白河法皇の三回忌にあたって法勝寺御八講が始められ、宮中最勝講、仙洞御八講とともに三講制度が打立てられてこれらの三会三講を経なければ公請を受けることができず僧官の上昇もおぼつかないほどきびしい僧制を打ち立てることにより僧團の統制をはかり、この法勝寺の優位性を高めようとしている。この点は法成寺と非常に異った性格を具えている。そして法勝寺は法成寺より官寺的性格が強められた

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について



法成寺伽藍の推定（治安2.）〔1022〕



法勝寺伽藍の復原（承暦1.）〔1077〕

のも両寺の相異なる点である。⁽⁵⁾ 例えば東大寺宗性の例を見ても次表の如くである。

いまこの三講制度というのは、宮中最勝講、仙洞最勝講、法勝寺御八講の三つを指すのであって、この三講の始まった時期については、宮中最勝講が長保四年（一〇〇二）五月七日より、仙洞最勝講は永年元年（一一一三）七月二十四日に、法勝寺御八講が天承元年（一一三二）七月

【宗性上人と三会・三講御八講参勤一覧】⁽⁶⁾

六勝寺の成立について

| 僧官 | 年 号 | 三会及三講 | 所役 | 年 齢 | 僧官 | 年 号 | 三会及三講 | 所役 | 年 齢 |
|--|-----|-------|----|-----|----|-----|-------|----|-----|
| 大法師 < | | | | | | | | | |

六勝寺の成立について

七日から始められた。宮中最勝講は一条院が、毎年五月中の吉日に清涼殿で五日間、国家平安、宝祚長遠のために、最勝王經・法華經等を講じて、これには四大寺（東大・興福・延暦・園城）のうちに稽古の聞えある僧をもって聴衆・講師・證義者として招いて法華八講を修されたのに始まる。つぎに仙洞最勝講については、白河院がはじめて院御所で行なわれ、上皇の宝祚長遠と国土安穩を祈る目的で修せられたのに始まる。

また法勝寺御八講は、白河法皇の国忌にあたって金泥の一切経を供養して、その追善法会を厳修されたのに始まる。このような三講制度の新たな成立は、三会制度のほかに僧綱への学侶たちの昇進への新しい階梯を設け、過去の五階の習得によって維摩会講師となる制度に代わって、三講聴衆および講師となったものをもって三会に参加して僧綱に昇進する資格を得る重要な法会となった。

これを釈家官班記の「顕宗名僧昇進次第」によると

三会遂業→三講（最勝講・仙洞最勝講・法勝寺御八講）→三会遂講（得業）→僧綱→三講講師→探題→證義者→正権別当→僧正

という順序を経ていることはさきの宗性の例でも判明する。そしてまた官班記の表から見ても、僧官である権律師に昇進するためには、もちろん三会、三講の翌義・聴衆の出度度数により僧官への昇進を査定されるべきものとされ、権少僧都・権大僧都はまた三会三講の諸講師・精義を経なければならぬほかに、長講堂・叡勝光院御八講等の度数も重要な昇進への公請でもあった、権僧正のような極官、あるいは法印権大僧都となって、諸大寺の別当となるためには、各諸八講などの證義者を経なければならなかった。このように院政期以後の三会制度は、この三講制度と合体化して、公請という絆で、固く結ばれて、各大寺の学侶の上におおいかぶさっていた。これは一面には延喜式以来の三会制度の実質的な慣習法的な改変ともいえるのである。そしてこのような三講制度の設置は四大寺をして貴族化することに役立つと同時に、藤原一門の貴種が寺院を基盤として寺院社会の上に君臨するに有利な条件をそなえるにいたった。三会・三講のこの二つの制度は、寺院内の学侶階層の教養振興を刺激し、ここに居る多くの貴族出身僧侶の昇進を有利に導いた。けれども四大寺などに属さない僧侶だとか、あるいは属していても出自の身分が低く維摩会などに参加できない僧侶には全く昇進の道が閉ざされていたといえるであろう。そして天台宗の僧侶についても釈家官班記では

一山徒昇進事。

註記。十藹。堅義。廿膈。等之請。山務政。之時。行之有。職。又隨。便宜。補。之。僧綱。座主或門。主舉奏。上古多叙。法

橋。近來任_二權律師_一。次第昇進如_レ常。學道經曆之輩。勤_二二會_一十一月。講師。以_二其勞_一任_二律師_一也。又法勝寺任_二學生_一者。准_二公請名僧_一之間。或勤_二最勝講等之聽衆_一。或_二勤大乘會以下講師_一。例多_レ之。非修非學之輩。舊儀不_レ任_二正員僧綱_一。近來更不_レ及其沙汰_一者也。就中於_二大僧都_一者。住侶拜任近代之例也。京都僧綱猶以隨分有_二清選_一。於_二住侶_一者殊就_二器用_一可_レ被_二抽任_一也。近來非_二其仁_一之輩被_レ聽_二之歟_一。官途之陵夷不便。云々。⁽⁹⁾

と述べて延暦寺で十年夏安居を終えたものをもって注記とし、さらに十年を経て諸会の翌義を終えたものが、延暦寺の寺務を執ることができた。そのうち座主等の推挙を得て法橋上人位に進むのが例であった。しかし近來では直ちに権律師に昇進し、学侶はさらに六月会（伝教大師最澄の忌日の六月四日に行う法華十講、法華大会ともいう。）と十一月会（天台大師智凱が十一月廿四日に入滅したために、このときまた法華大会を行う）の二会を勤めてはじめて講師となり、またその労効を以て律師に昇進するのである。そしてそのうち法勝寺学生に任ぜられ、公請をうけ、最勝講聴衆や、法勝寺大乘会に参加して、いはゆる三講制度にのっとって昇進していったのであって、ここにも法勝寺と天台宗との強いつながりがうかがえるのである。

このように三講制度を通じて考えると、法勝寺は以前の法成寺に見られない僧官制度とのつながりがあって、南都の興福寺維摩会にもまさる位置を占めることになった。ここに法勝寺を固定化する要素が確立されたと同時に、いまだ南都維摩会のみ依存していた藤原氏出身の僧侶にきびしい試練を与えることにもなった。さらに京都における法勝寺は国王の御願寺であると同時に南都北嶺の僧官を統轄する役目までも持つようになったのであった。この寺の組織については次に触れることにするがその意味からも法勝寺の金堂や、講堂は重要な意義を持っていたといえるのである。

つぎに五大堂については法成寺では二丈の不動明王を中心に丈六の四大明王を配しているが、この堂での祈願は「爲_レ降_二家門_一成_二怨之怨靈_一や、爲_レ專_二弟子臨終之正念_一也」⁽¹⁰⁾と五大堂は藤原一門への怨靈を調伏し、道長の臨終時における死に対する恐怖を除去しようとするものであった。

法勝寺五大堂では法成寺のような藤原一門や弟子道長等の個人的な願意を求めるものでなく、また像高も不動明王は六尺も高く堂々と仕つらえ「降_二伏惡魔_一、消_二散怨靈_一會_レ修_二究竟秘密之行法_一」⁽¹⁰⁾との祈願のもとに作成されたがここでは一族のためでなくあらゆる降魔の秘法を修する

六勝寺の成立について

ために建てられた。

またつぎに薬師堂では七仏薬師の修法が行なわれ、この堂ではさきに四円寺で述べたように、本尊として薬師如来七体を安置してそこで七仏薬師法を行ない中宮安産、玉体安穩、日食、御悩平癒、風雨の難等を祈ることになっている。

しかし、平安末期に於ける浄土信仰の発展は来世得脱を求めるためにまず九品往生を示す九体阿弥陀仏を安置する阿弥陀堂を建て、そののちに金堂を建立して寺院の中心伽藍を定め、そこに密教の中心である大日如来を安置し、さらに七仏薬師法を修して、現世に於ける自縁・他縁の苦悩を抜除するための薬師堂を建てる形態は法成寺、法勝寺等の共通した伽藍構造で、この点法勝寺は法成寺に範を求めたのであるといえる。

しかし御願寺として最大を誇った法勝寺は法成寺の金堂前の奏楽の場所としていた中島に九重塔を持って来たことは法成寺と大きな相異を示しているのである。

この九重塔は法勝寺供養後、五年にて建てはじめられ、永保元年（一〇八一）八月二十四日に木作を始めて二十五日に地鎮を行ない、九月廿七日に心礎を置き、十月二十七日に心柱を立て永保三年（一〇八三）十月十日に供養を行っている。その塔の位置や、諸尊については、法勝寺御塔供養願文に

| | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 金堂南面 | 瑤池中心 | 更課馬鈞 | 新造雁塔 | 層級龜室 | 取法栖靈 | 八角九重 | 齋度崇福 |
| 窮神盡妙 | 瑩玉範金 | 風鐸和鳴 | 露盤照耀 | 超々擯俗 | 歩々乘空 | 仰同翔鷗 | 俯顧飛鳥 |
| 金剛界會 | 五智如来 | 紫磨添光 | 百鍊比影 | 中尊八尺 | 分座四方 | 自餘諸尊 | 各安四角 |
| 表別之裏 | 藏金字經 | 八方之楹 | 圖月輪佛 | (中略) | | | |
| 法輪不退 | 到慈氏朝 | 善根彌薰 | 傳樓至世 | 捧此功德 | 先資一人 | 瑤圖長堅 | 斗獻久轉 |
| 三戒水潔 | 渙忍永銷 | 五蘊雲晴 | 掩曖頓盡 | 白葉不朽 | 必備白毫 | 丹心惟深 | 將開丹菓 |
| 曾沙添慶 | 儲鉉壇榮 | 百穀用成 | 五徵時若 | 鯉川鶴園 | 石山劒林 | 悉免昏衢 | 北到慧岸 |

とあって、金堂の前、瑤池の中央に、八角九重の塔を建て、その高さは二十七丈（約八十二米）で、塔内に五智如来（八尺）を四方に分けて

安置し、中央に金剛界大日如来を置き、金堂の胎藏界大日如来と相對した。このような八角塔の様相を示すものとしては、長野県安樂寺の八角三重塔が禪宗様式にしても鎌倉末期のものとして見られる。¹²これは華嚴塔と称されるもので宋風文化を受けたものであったかもしれない。しかしこの塔は「先資一人」として白河朝の朝威を示すもので、白河天皇のために建立し、五穀成熟、法輪不退を願っている。この法勝寺造立への天皇の意図は即位当初より存在し「抑助神威者佛法也、守皇圖者又佛法也、因茲弟子在位當初殊發弘願洛城之東、占一勝境、建大伽藍（中略）願念又成就、福力增長者、壽命又增長、昔黃帝之間天老也、以百廿爲長壽、（中略）弟子省躬思之、屈指計之、若折念百廿者、前跡是希有、若相期八十者、殘端非幾程、唯依一心之冲襟、欲延十年之餘算、然則國主皇帝三代之祖、於天下無儔（中略）十方如來施護持亦命、同金剛、遂得耨菩提、必生安養淨刹、又德是有隣、功亦無量、法輪聖主、太上天皇國母后房皇子公主一善所及、万壽無疆」¹³この大治三年十月廿二日に石清水八幡宮に宸筆一切経を捧げて白河法皇は自分の過去の姿をたづね願意をこれらのなかに含め、死期を知った法皇（大治四年七月七日崩御）はさらに八十才を望み、また百才まで生きのびようとする必死の願いが示されていると同時に、白河法皇が、堀河・鳥羽・崇徳の三代の祖として天下の安穩を願がい「願念又成就、福力增長者、壽命又增長」を求めたのが外ならぬ法勝寺伽藍の造立であったことはいうまでもないのである。

ことに白河天皇の即位は、堀河天皇八才、鳥羽天皇五才、崇徳天皇五才、近衛天皇三才、の幼帝の踐祚に比べて年長の即位であり、また摂関政治下における一条天皇七才、後一条天皇九才の幼帝即位による摂関政治の専制下と同じ政治的基盤を作るために廿才の即位はかなり実力を發揮できる立場であった。そして白河天皇が、院政に示した「御在位十四年、院号四十二年、政出自自叡慮餘不依相門」¹⁴という強い意志がこの法勝寺の造立に大きく働いたことは否めない。

栄花物語の著者は法勝寺供養について、天皇の法勝寺造立への発心は「いかでかくおぼしめし寄せ給けん、御年も若くおはします。位にても久しうもならせ給はぬを、げにさきの世よりおぼしめしける御願にこそぞと見えさせ給へる」¹⁵と即位直後より法成寺にまさる伽藍を建て、その構造も寧ろ法成寺に倣いそれをのりこえるところに白河天皇の意欲が高まったのであるとも考えられる。しかしそれは天皇自身の考えであると同時に、院近臣の強い要望でもあったし、摂関政治を廃して親政化しようという後三条天皇の遺志をつぐものであった。

この法勝寺での法会は毎年正月六日に金堂の修正会と阿弥陀堂修正会を二月八日頃には常行堂修二会、三月十日頃阿弥陀堂での春の念仏始

六勝寺の成立について

（法勝寺不断御念仏ともいう）五月一日より十ヶ日法勝寺三十講、七月三日より七日まで法勝寺御八講、七月十五日法勝寺白恣、九月廿二日法勝寺阿弥陀堂御念仏が三ヶ日行なわれ、十月廿四日より五ヶ日法勝寺大乘会が実施されこれがこの寺の最大の行事であった。そのほか千僧御読経や盂蘭盆講等もしばしば行なわれて院政期の御願寺の中心的存在であった。また両寺は成立時において五十五年余の年月の隔りがあるけれども、共に寢殿造りを基調とした伽藍配置であり、それは浄土曼荼羅的発想によるものといえよう。また法勝寺が左大臣藤原師実の白河殿の旧地をうけついで建立されたことにもよるであろうが、やはり法勝寺の方がより整然としている。

ことに池水をめぐらす寺院の構築はすでに円融天皇の御願寺の円融寺の場合にも見られ、池を中心として御願堂を建て、七仏薬師日光・月光・五大尊を安置して、また池の東に法華三昧堂、大門、西大門を配して、その遺構は現在の竜安寺の前庭の池である。このように寺院内に宸殿造形式をとり入れるのは、もともと宇多法皇の仁和寺形成の過程においても見られたところであって、仁和寺の場合、仁和寺金堂や円堂院を中心として、伽藍が形成されこの円堂院と御室の原型は、明らかに淳和太皇太后が、父帝の離宮であった嵯峨院をもって大覚寺とした場合と同様、ここにも離宮寺院の形成の状況を見ることができる。ただ清和天皇がその崩御直前に寺院とした円覚寺の場合とは異なるものの、仁和寺でも、宇多法皇は退位落飾後、この寺を形成して崩御のための御所として居住しているという状況が見られ、さらにそこが息災祈願の寺院であると同時に入滅のための場所として予定されていたのである。

この宇多法皇の御室形成は寺院と御所との連がりを持つ形態として、のちの藤原氏の祈願寺（法性寺・法成寺）の形成や、六勝寺の形成の原型として見るべきであろう。¹⁰⁷

このように仁和寺における御室をともなった御願寺として発展してゆくのであるが、池をとり入れたのは円融寺からである。池の導入は一方では浄土信仰の影響のもとに阿弥陀経浄土変の現実化、すなわち極楽浄土をこの土に再現したいという貴族社会に於ける強い願望によるものであり、他方では藤原貴族の住宅建築の発生に影響されて円融寺等では池水をとりいれ中島を形成して伽藍の形態が平安初期の様相より変転していったのである。

ことにそれが法成寺や平等院になるとより鮮明になって、藤原道長の法成寺の場合は、道長の眼病、それが三条天皇の怨霊のしわざと考え、さらにその苦悩より脱脚せんとして「いつしか東に御堂建てて、さしう住むわざせん」との願望のもとに建立し、その法成寺も円融寺になら

って池水を入れ寢殿形式をとり入れ、最初に無量寿院を建てはじめるのであって、それはあたかも観無量寿經の寶池觀・寶樓觀をこの世に再現することを願ったと考えられる。すなわち經文の

次當^ニ想^ス水^ヲ、想^ス水^ヲ者、極樂國土^ニ有^リ八池水^一、一^ニ池水^一、七寶^ノ所成^{ナリ}、其寶柔輓^ニ從^ニ如意珠玉^一生^ジ、分^レ爲^ル十四支^一、一^ニ支^一、作^シ七寶^ノ色^ヲ、黃金^ヲ爲^ス渠^ノ、渠^ノ下^ニ皆^ナ以^テ雜^シ金剛^ヲ以^ス爲^ス底沙^一、一^ニ水中^一有^リ六十億^ノ七寶^ノ蓮華^一、一^ニ蓮華^一、團圓正等^ニ、十^ニ由旬^一、其摩尼水^ノ、流^シ注^シ華間^ニ、尋樹上下^ノ、其聲微妙^ニ、演說^ス苦空^ノ、無常無我^ノ、諸波羅蜜^ヲ、復^ナ有^リ讚^ム歎^ム、諸佛相好^ノ者^ヲ、如意珠玉^ノ、涌^シ出^ス金色^ノ、微妙光明^ニ、其光化爲^ス百寶色^ノ、鳥^ノ和鳴^シ哀雅^ニ、常讚^ム念佛念法念僧^ノ、是爲^ス八功德水^ノ、想^フ名^ヲ第五觀^ト、

衆寶國土^ノ、一^ニ界上^一有^リ五百億^ノ寶樓閣^ノ、其樓閣中^ニ有^リ無量^ノ諸天^ノ、作^シ伎樂^ヲ、又^ニ有^リ樂器^ノ、懸^セ處^ニ虛空^ニ、如^ク天寶幢^ノ、不^レ鼓^シ自^ラ鳴^ル、此衆音^ノ中^ニ皆^ナ說^ク念佛念法念比丘僧^ノ、此想成^ジ已^レ、名爲^ス粗見^ト、極樂世界^ノ、寶樹寶地^ノ、寶池^ノ、是爲^ス總觀想^ト、名^ヲ第六觀^ト、

若^シ見^ル此者^ハ、除^キ無量億劫^ノ、極重惡業^ヲ、命終之後^ニ、必^ズ生^ズ彼國^ニ、作^シ是觀者^ノ、名爲^ス正觀^ト、若^シ他觀者^ノ、名爲^ス邪觀^ト、

とあるそしてこの総觀想や、寶池想を伽藍建築や寢殿造のなかに具現して來世の得脱を求めようとしたといえるのである。ことに藥師堂、阿弥陀堂、五大堂等はそれぞれ極樂の寶殿に見立てて、現世に見聞する淨土を再現し、その觀想をそのまま來世までも求めて生きつづけようとする悲願は平安末期において末法意識が強まるにつれて道長も白河天皇も共に感じていたのであって、白河天皇の「世漸く澆季におよび、末法に属すといへども」仏寺造立の悲願はより高ぶり「速かに九品を證し」て怨念を断とうとする願望が、池水を配した極樂淨土に模した伽藍配置とさせたものと考えられる。そして先にも述べた如く無量寿院や阿弥陀堂からこれらの寺院の創建が始まったというべきである。

またつぎに尊勝寺の場合は、金堂、講堂、藥師堂、五大堂、觀音堂、灌頂堂、曼荼羅堂、東西塔、中門、廻廊、經藏と建てられたのち三年後に阿弥陀堂、准胝堂法華堂が建て増された。この尊勝寺伽藍もおそらく法勝寺に類似した形体を具えていたであろうとおもわれる。しかし法勝寺はその伽藍の中心は講堂で、そこは頭教の広学堅義の場として重要な意義をもっていたのに対して、尊勝寺はむしろ灌頂堂を中心とする密教道場を中心としているが、具体的な史料は法勝寺等に比べてはるかに少ないために詳細なことは明らかでないが、塔三基、金堂、五大堂、藥

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

師堂、灌頂堂等が主要な伽藍であった。²²⁾そしてこれら四勝寺は境内一町あるいは二町に限られていた。

また円勝寺では東西御塔として三重塔が建てられ大治三年三月十三日に供養が行なわれて、金堂には二丈の大日如来と丈六の四仏を安置し、五大堂、薬師堂が存在し、のち六時堂と二階門や鐘樓が加えられた。²³⁾

つぎに成勝寺は保延五年に創建され、そのときの成勝寺供養式によると金堂、経蔵、鐘樓、廻廊四門等が見え、²⁴⁾また成勝寺年中相折帳では観音堂、五大堂および惣社が建てられたほか南大門等も存在していたが、もちろん法勝寺等と比べて六勝寺の中では最も規模の小さな寺であった。

また延勝寺については、久安二年七月に建て創められ久安三年に金堂、御塔、鐘樓、経蔵の礎石をすえ、²⁵⁾供養が久安五年三月廿日に行なわれ金堂、南大門、東西軒廊、廻廊、一字金輪堂などが建てられ盛大な法会が行なわれた。²⁶⁾

そのうち長寛元年十二月二十六日に阿弥陀堂の供養がなされた。この阿弥陀堂は近衛家の寝殿であったのを間敷を延ばして九体の丈六仏を安置して阿弥陀堂としたものであった。²⁷⁾

しかしこのようにして伽藍が白河周辺にたちならんだこの六勝寺も二度にわたって、それも壊滅の憂目にあった。

第一回は元暦二年(一一八五)七月九日の京都大地震により「白川辺御領等或いは顛倒あり。或いは築垣の許破壊し、法勝寺九重塔は心柱倒れずといへども、瓦以下みな震剝し、成す無きが如し、大地処々被裂して、水出でて涌くがごとき」状況となった。²⁸⁾ことに法勝寺では

「法勝寺九重塔頽落重々、垂木以上皆落地、毎層柱扉連

子被相殘、露盤八殘其上折落、阿彌陀堂并金堂之東西

廻廊、鐘樓、常行堂之廻廊、南大門西門三宇、北門一

宇、皆顛倒、無一字全、門築垣皆壞、南北面少々相殘云」²⁹⁾

という状況でこれは法勝寺のみならず、法成寺や得長寿院等も同様で、あの壮大を誇った法成寺も、廻廊はすべて倒れ、東塔は北に傾いて組物ばかり傾むかないで残っているあわれない姿となり、また東面の築垣すべて倒れ門ばかりが残っていた。人々は「心神違乱し天下破壊はこの時か、近年兵革上下安きなく、まったく濁世の悪業、衆生の苦患、休むときなく悲しむべき時がやって來たとなげいた。

鴨長明もこの時のことを方丈記のなかで、

「おびたしく大地震ふること侍りき。そのさま、よのつねならず。山はくづれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、嚴割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にたゞよひ、道行く馬はあしの立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれぬ。塵灰たちのぼりて、盛りなる煙の如し。地の動き、家のやぶるゝ音、雷にことならず。家の内にをれば、忽にひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。龍ならばや、雲にも乗らむ。恐れの中に恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覺え侍りしか。」³²⁾

と述べている。この時の地震は十日及び廿日間余震が絶えなかって三ヶ月もつづいた。

そしてまた六勝寺の被害も相当なもので、法勝寺では金堂、廻廊、阿弥陀堂、阿弥陀堂御所行堂廊、中門、車宿、門々、(法華堂は顛倒せず)三面築垣、九重塔過半分、が被害に会い尊勝寺では講堂、五大堂、四面築垣、西門東塔九輪折落し、最勝寺は藥師堂、三面築垣が倒れ、円勝寺は築垣と中御塔九輪が破提した。³³⁾

また次に六勝寺の灰燼については、承久元年(一二一九)四月二日午前に尊勝寺に金物を盗りに入った盗人が放火して西塔が焼けたのにつづいて、午后近衛町より火が出て出雲路東出河原まで焼いた。このとき関白近衛家実の邸を始め法成寺南大門、東西門東塔、惣社、左右脇門、祇陀林寺、河崎觀音堂、東北院、円勝寺塔三基、鐘樓、西面門、金剛勝院等が炎上してまさに天下の大災となった。³⁴⁾またつづいてこの年の十一月廿七日に白河附近より火が出て、延勝寺塔、金堂、成勝寺、最勝寺塔三基、金堂、證菩提院等が放火のために灰燼に帰した。^{35) 36)}そしてこの六勝寺の炎上は、ある意味において平安時代における六勝寺の滅亡につながるものであった。

その後法勝寺は再建されたのち九重塔等も雷火による炎上と再建をくりかえしその結果衰退の一途をたどり、康永元年(一三四二)にいた鎌って倉期に再建された伽藍や堂塔は尽く、また灰燼に帰してしまった。そのものすごい状況を太平記は次の如く述べている。

「康永元年三月廿日ニ、岡崎ノ在家ヨリ俄失火出来テ驢テ焼靜マリケルガ、纔ナル細煙一ツ遙二十餘町ヲ飛去テ、法勝寺ノ塔ノ五重ノ上ニ落留ル。暫ガ程ハ燈籠ノ火ノ如ニテ、消モセズ燃モセデ見ヘケルガ、寺中ノ僧達身ヲ揉デ周章迷ケレ共、上ベキ階モナク打消ベキ便モ無レバ、只徒ニ虚ヲノミ見上テ手撥テゾ立レタリケル。サル程ニ此細煙乾タル檜皮ニ焼付テ、黒煙天ヲ焦テ焼ケ上ル。猛火雲ヲ卷テ翻ル色ハ

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

非想天ノ上マデモ上リ、九輪ノ地ニ響テ落聲ハ、金輪際ノ底迄モ聞ヘヤスラントヲビタ、シ。魔風頻ニ吹テ餘煙四方ニ覆ケレバ、金堂・講堂・阿彌陀堂・鐘樓・經藏・総社宮・八足ノ南大門・八十六間ノ廻廊、一時ノ程ニ焼失シテ、灰燼忽地ニ滿リ。焼ケル最中外ヨリ見レバ、煙の上ニ或ハ鬼形ナル者火ヲ諸堂ニ吹カケ、或ハ天狗ノ形ナル者松明ヲ振上テ、塔ノ重々ニ火ヲ付ケルガ、金堂ノ棟木ノ落ルヲ見テ、一同ニ手ヲ打テドツト笑テ愛宕・大嶽・金峯山ヲ指テ去ト見ヘテ、暫アレバ花頂山ノ五重ノ塔、醍醐寺ノ七重ノ塔、同時ニ焼ケル事コソ不思議ナレ。院ハ二條河原デマ御幸成テ、法滅ノ煙ニ御胃ヲ焦サレ、將軍ハ西門ノ前ニ馬ヲ轂ラレテ、回祿ノ災ニ世ヲ危メリ。

抑此寺ト申ハ、四海ノ泰平ヲ祈テ、殊百王ノ安全ヲ得セシメン爲ニ、白河院御建立有シ靈地也。サレバ堂舎ノ構善盡シ美盡セリ。本尊ノ鑄ハ、金ヲ鏤メ玉ヲ琢ク。中ニモ八角九重ノ塔婆ハ、横翌共ニ八十四丈ニシテ、重々ニ金剛九會ノ曼陀羅ヲ安置セラル。其奇麗崔嵬ナルコトハ三國無雙ノ鴈塔也。此塔婆始テ造出サレシ時、天竺ノ無熱池・震旦ノ昆明池・我朝ノ難波浦ニ、其影明ニ寫テ見ヘケル事コソ奇特ナレ。カ、ル靈德不思議ノ御願所、片時ニ焼滅スル事、偏ニ此寺計ノ荒廢ニハ有ベカラズ。只今ヨリ後彌天下不レ靜シテ、佛法モ王法モ有テ無ガ如ニナラン。公家モ武家モ共に衰微スベキ前相ヲ、兼テ呈ス物也ト、歎ヌ人ハ無リケリ。」⁸⁰

そしてここにおいて旧観は滅してもとの如く再建されることはなかった。

- (1) 小論「藤原氏の氏寺と天台宗の進出について」大手前女子大学論集第十二号六〇頁参照
- (2) 扶桑略記第三十 承保三年十二月十八日条
- (3) 待賢門院奉名白河院追善(本朝續文粹卷十三)
- (4) 本朝文集第四十九 白河天皇六条御堂発願文
- (5) 小著「東大寺の歴史」一一〇頁(東大寺宗性上人の研究と史料〔上・中・下〕平岡定海著参照)
- (7) (8) 釈家官班記下
- (9) 法成寺金堂供養願文(治安二年七月十四日) 本朝文集第四五一八七頁
- (10) 小論「四円寺考」、古代史論叢(前掲) 四七七頁
- (11) 朝野群載(大系本)二、法勝寺御塔供養咒願文
- (12) 国宝安楽寺八角三重塔、鎌倉時代
- (13) 白河法皇八幡一切経供養願文(本朝統文粹十二)

(14) 中右記大治四年七月十五日条

(15) 栄花物語三十九布びきの瀧（日本古典文学大系本） つぎにその本文を示し、そこに法勝寺の伽藍の様相がかなり詳細に述べている。

白河殿とて宇治殿の年頃領ぜさせ給し所に、故女院もおはしましうが、天狗ありなどいひし所を、御堂建てさせ給。この二年ばかり受領ども當りて、金堂は播磨守爲家ぞ造りける。御堂も佛もなべてならず大きにおはします。疾くと急ぎ造らせ給て、十月廿餘日供養ぜさせ給に、中宮も渡らせ給べく申させ給を、さらでもとおぼしめしたれど、「かばかりの大事に、いかでかは御覽ぜでは」と、せめて申させ給へば、渡らせ給。いとめでたし。曇なき庭に、紅葉、菊の色く、黄なる光も赤き光も添ひたらんと見えて、所がら匂を増し、御堂のけ高うものくしきが、新しう赤く塗り立てられたるに、青やかに見え渡されたる御堂の飾など、極樂にたがふ所なげなり。瑠璃の地に黄金の砂子などを敷かぬばかりなり。池の水澄み渡り、船樂、打たぬに鳴る事ぞなかりけれと、大鼓かけたる様ことくしう、獅子・狛犬の舞ひ出でたる程もいみじう見ゆ。三百人の僧の麗しく装束きて行道し、衆僧など押し加へて千人の僧も拜みつべし。わらはべ花を折りて装束きたるもおかしう見ゆ。行幸などの程もいとめでたし。別當・檢校よりはじめて、寺主・供僧なにかなどなり。阿闍梨よりなど、いとめでたし。いたう夜更けてぞ還らせ給ける。いかでかくおぼしめし寄らせ給けん。御年も若くおはします、位にても久しうもならせ給はぬを、げにさきの世よりおぼしめしける御願にこそとぞ見えさせ給へる。供僧にやむ事なき僧綱などなりて、供養法行ひ勤めけり。「天狗、え造らせ給はじとねたがりいふ」ときしかど、かくて供養も過ぎぬめり。」

(16) (10) に全じ、四六四頁

(17) 小論「御願寺における真言宗の進出について」『統律令国家と貴族社会』四四八頁

(18) 栄花物語十五

(19) 大正蔵十二、三六五、仏説無量寿經

(20) (4) に全じ

(21) 中右記康和四年七月廿一日条

(22) 殿暦元永元年十二月十七日条

(23) 本朝文粹十二敦光朝臣四勝寺供養咒願文（大治三年三月十三日）

(24) 百練抄第六 保延五年十月廿六日条

(25) 成勝寺供養式（統群書類従二十六輯下）

(26) 平安遺文十五〇九八号

(27) 本朝世紀卅二 久安三年六月十七日条

(28) 全右 卅五 久安五年三月廿日条

(29) 百練抄第七 長寛元年十二月廿六日条

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

またこの六勝寺の創建等のことについて「京都の歴史」のなかでは村井康彦氏が詳細に「六勝寺と鳥羽殿」について述べられている。

③0 玉葉卷四十二、元暦二年七月九日条

③1 山槐記 元暦二年七月九日条

③2 方丈記（日本古典文学大系本三二頁）

③3 吉記 元暦二年七月九日条

③4 仁和寺日次記 承久元年四月二日条

③5 百練抄第十二 承久元年四月二日条

③6 百練抄十二 承久元年十一月廿七日条

③7 太平記二十一 法勝寺塔炎上事

三、六勝寺成立の意義

六勝寺建立の意義について、竹内理三氏は院政期の寺院を分けて(1)門徒寺 (2)氏寺 (3)院願寺として、門徒寺は門跡寺院と理解され、氏寺は貴族を檀越として持つ寺院を意味し院願寺は六勝寺を指すものと述べられているがこのことについて六勝寺を院願寺と規定すべきかどうかについて私は疑問を持っている。もちろん中右記の大治四年（一一二九）七月十五日の白河法皇御葬送のことの記事のなかに

「禪定法王御在位間希代勝事

嵯峨御幸、殿上賭射

法勝寺、白河御堂、證金剛院鳥羽

每靈社立塔婆其數數多

凡。雖。尊。勝。寺。最。勝。寺。円。勝。寺。皆。出。徒。法。王。御。慮。也

御在位十四年 院号後四十三年、政出自叡慮 全不依相門」⁽¹⁾

と白河法皇の政治はすべて法皇自身の考えによって他の人々の口入を許さなかったと述べ法勝寺大乘会の結願文にも「方今此會者。招釋門之樞鍵。究法水之淵源。忝出叡誠。妙叶佛智。非且人事之勝槩。寔斯佛法之中興也。」⁽²⁾また円勝寺等も法皇の叡慮にもとづくものであると説明して

いることを重視して竹内氏は成勝寺や延勝寺を建てられた崇徳天皇や近衛天皇の立場よりも鳥羽上皇の立場がより専断的で強力であったためこれらの状況よりして「崇徳、近衛両帝の鳥羽上皇院政下に於ける境遇を考えて見れば、いづれもこれを院御願寺とすべきことが許されよう」⁽³⁾と六勝寺を実質的立場より院御願寺すなわち院願寺と規定されている。

また村井康彦氏は六勝寺について愚管抄の「国王の氏寺」との説を引用して「法勝寺は従来の仏教の総合がじつに法勝寺であった。(中略)当寺が金堂を中核としている処にある種の国家的意識の昂揚が看取される。(中略)しかし法勝寺にそうした国家的性格が認めるとしても、すでに鎮護国家を祈り王法佛法をうたった天平仏教の再現でない。天皇家の御願寺という限定された性格もまた否定しがたい。その点、先に引用したように『愚管抄』が当寺を称して『国王ノ氏寺』としたのはまことに適切な表現というべきである。⁽⁴⁾また菊地勇次郎氏も平安仏教の展開(日本仏教史・古代篇)のなかで国王の氏寺建立と題をかけた、「院政時代に入ると、私寺の建立は藤原氏に代わる政治の中心、院政の主ゆだねられた。(中略)天台・真言の両宗は、その祈禱性のゆえに皇族を造寺の願主とし、「国王の氏寺」を頼ることによって、私寺とはいえ再び国家的宗教の性格を明らかにしている。」と述べている。

この院願寺、国王の氏寺の二説については、もちろん造寺の主動性は院政である以上院の指導のもとに造寺されたであろうけれども、これを以て院願寺、または院御願寺と速断することは適当でない。何となれば建立された時期はすべて天皇の在位中に建てられ、法勝寺にしても白河院が白河天皇として在位中であり、最勝寺においても鳥羽天皇の在位中であることから考えても、あきらかに退位後の寺院でない以上院願寺ではなく、勅願寺の性格をもった御願寺である。法勝寺の木作始の法勝寺の寺名決定以前においては「白河御願寺立柱上棟」⁽⁵⁾とか、法勝寺御塔供養咒願文に「聖上 殊_ニ宸冲_一、建_ニ大伽藍_一 号_ニ法勝寺_一」⁽⁶⁾とあって、法勝寺は白河天皇の御願寺で、勅願寺的性格が強い。しかし平安以前の勅願寺とはその性格は異り、法成寺で藤原道長が行ったような阿弥陀堂の附近に御所をしつらえて往生を願う御室的性格も附加されてきた。そして承保三年(一〇七六)五月廿三日に「白河御願阿弥陀堂」が「白河御願寺」の寺域内に建てられ六月廿九日には「被_レ築_ニ白河御殿阿弥陀堂壇」⁽⁷⁾がきづかれるなど白河御願寺の上棟と共に阿弥陀堂がまず建立されたのであるが、ここにも白河御願寺と称して白河天皇の御願寺であることを明示している。⁽⁷⁾

つぎに尊勝寺の場合を考えると「新御願」⁽⁸⁾「新御願寺上棟」⁽⁸⁾とか康和四年(一一〇二)七月廿一日の尊勝寺供養会に際して「今日白河新

六勝寺の成立について

御願寺号尊勝寺供養会也」とか「馳参御願寺」と称して尊勝寺の場合も新御願寺と述べて堀河天皇の新しい御願寺として成立したことをあらはしている。また最勝寺においても「於白川新御願寺有最勝講御読經云云」とまた白川新御願寺と称している。さらに円勝寺の場合も「法勝、最勝蓮宮ト隣、三層五層華塔接砌、就斯吉土」と、待賢門院の御願寺であるけれどもこれもやはり白河御願寺と称された。

ことに延勝寺においても、その木作や供養に先立って「新御願寺」と称し、また「御願延勝寺供養」と称し、寺名が決定しない以前は新御願寺であった。ことにこの延勝寺の供養に際しての日時決定について差出された陰陽寮からの通達についても、

陰陽寮

擇申可被_レ供_ニ養新 御願寺二日時

今月廿日壬寅 時午二點

久安五年三月八日

雅樂頭兼主計助權陰陽博士安倍朝臣

兼助兼權天文博士安倍朝臣

頭兼權曆博士賀茂朝臣⁽¹²⁾

とあきらかに六つの寺は新御願寺とあって、六勝寺の寺名が決定しない以前はすべて新御願寺と称している。そして私は六勝寺については在位の天皇の勅願にもとづいて岡崎周辺に建立された勅願寺の性格を帯びた御願寺であると考えざるべきである。それがたとえ背景にある院の潜在的支配権の反応によると考えても、表面上はやはり御願寺と理解するのが正当と考えるほうが適切である。

またつぎに愚管抄の著者の慈圓が述べている国王の氏寺と称することについて見てみると、

白河ニ法勝寺タテラレテ國王ノウヂ寺ニ是ヲモテナサレケルヨリ、代々皆此御願ヲツクラレテ、六勝寺トイフ白河ノ御堂大伽藍ウチツヅキアリケリ。ホリカハノ院ハ尊勝寺、鳥羽院ハ最勝寺、崇徳院ハ成勝寺、近衛院ハ延勝寺、是マデニテ後ハナシ。母后ニテ待賢門院ノ円勝寺ヲ加ヘテ六勝寺トイフナルベシ⁽¹³⁾

この意見は辻善之助氏や多くの学者が認めこの院政期の御願寺を天皇が藤原氏の氏寺に似せて建立されたという概念のもとにこれら六勝寺を始めとして御願寺の変遷を理解しようとしたのであろう。

私はこれはやはり慈円が藤原氏出身の貴族であるために氏寺的理解のもとで、六勝寺の位置を意義づけたのではないだろうか。すなわちもし氏寺というならば国王すなわち天皇は氏長者に位置するのか、あるいは院、いわゆる上皇が氏長者に当るのか、この国王の氏寺の氏寺に対する適切な理解を明確にしないところに六勝寺を単に国王の氏寺と理解する薄弱さがあるのである。

ひるがえって氏寺であった法成寺の意義を考えてみると、法成寺金堂供養願文に

我法可_レ久弘。王燭長明。我寺可_レ長興。長秋共_レ其德。少陽重_レ其明。准后之家。攝籙之寄。及亟相納言。男女子孫。氏族繁昌。

其麗不_レ億。亦合契之尊卑。同志之縉素。各發_レ聲華之榮。共詣_レ菩提之緣。乃至四生六趣。百界千如。忽入_レ拔苦解脫之門。日

遊_レ極樂功德之界。¹⁴⁴

我寺長く興して子孫繁栄して氏族繁昌を求めたいという道長の願意は法成寺が藤原氏の氏寺にふさわしいものであったことが明らかであって、国王の氏寺という国王個人の子孫繁昌を求める願意は法勝寺の種々の願文に見当たらないし、法勝寺を法成寺成立と同義に理解することは適当でないと考えるものである。

そのため私は中石記や、その他の記録によって伝えている六勝寺を御願寺とまともに正しく理解するのが至当と考える。それは天皇代々の御願寺であり建立されるときはすべて新御願寺と称していることでもわかる。そして新御願寺が発足したときに寺名が決定されるのであって、やはり六勝寺は御願寺であると同時に非常に勅願寺的な性格をもっているとしても、天台、真言を中心とする密教的な性格を強くもちつつ、その性格として、寝殿的伽藍である法成寺をモデルとした伽藍形式をもっているため国王の氏寺と称されたのかも知れない。

これはまた法勝寺の三講制度の導入によってもうかがえるし、尊勝寺や最勝寺についても

尊勝寺。

長治元年。三月廿四日。於_レ尊勝寺。始被_レ修_レ結緣灌頂。始大阿闍梨覺行親王賜_レ勸賞。^{仁和寺圓堂院被_レ寄_レ阿闍梨五口。}

小阿闍梨寛智任_レ權律師。當座自今已後。東寺天台各兩年准_レ三會二會。可_レ被_レ任_レ僧綱。之由宣旨。永
久元年九月廿五日宣旨。偏天台兩。延曆園城。可_レ勤_レ之。云云。仍自今以後東寺不_レ勤_レ此御願。^{依_レ天台宗徒訴_レ也。}

今年大阿闍梨座主。法印權大僧都。山。仁豪小阿闍梨。山。嚴行。

六勝寺の成立について

六勝寺の成立について

最勝寺。

保安三年十二月廿五日。被_レ始行_ニ結縁灌頂_一。尊勝寺大小阿闍梨勸_レ之。已後付_ニ尊勝寺大小阿

闍梨_ニ可_レ行_ニ兩界_一之由宣下。云云。大阿闍梨權大僧都。寺。公伊小阿闍梨。寺。慶實。内供奉。

四五

とある如く最勝寺の結縁灌頂を修したものは三会二会に准じて僧綱に任ぜられこれまた密教の登龍門となり東寺と天台より補任されたが、東寺はしりぞけられて山門のみとなり、最勝寺は尊勝寺に附属して結縁灌頂を実施することになり六勝寺への天台密教の進出はすさまじいものがあった。

このようなこともまた六勝寺が勅願寺的御願寺であることによって僧綱昇進と寺院の法会を強く結びつけたのであって、院の私寺と見るべきでなく、院の私寺は安楽寿院や蓮華王院、法金剛院等に於て考えるべき問題である。

そしてこの六勝寺を建立するに当っては、国家の経済を動かして建立している。

しかしその建立の方法や、寺院管理のあり方、主導的立場の性格についてさらに追求しなければならないことはいうまでもないのであって、六勝寺の成立は私は御願寺と考えるべきであるが、その建立の方法や、経済的基礎の樹立、さらには院別当の高階氏や、知行国、庄園等の開闢するところは決して奈良時代よりの古代寺院のあり方でなく、より改変された院政政権の独自の形体をそなえ、それは寺院の創建にあたって知行国制にもとづく基盤や院領の集積のうえに建てられて、あるときには院政政権の経済的カクレミノ的な様相さえ示し、院御領の形成に少からず役立っていったのが六勝寺であって、ここにこそ院政期における六勝寺の性格が明らかとなるのであって、六勝寺は院御願寺でもなく、国王の氏寺でもなく、正しい意味の御願寺として四円寺の伝統を受けつぐものであることを強調するものである。次にその性格と構造についてさらに論を改めて述べることにする。

(1) 中右記大治四年七月十五日条

(2) 本朝文集第五十三 法勝寺大乘会結願文

(3) 竹内理三氏「律令制と貴族政権」——六勝寺建立の意義——五六—頁参照

(4) 京都の歴史(Ⅱ) 六勝寺と鳥羽殿(村井康彦氏担当) 一二—頁参照

(5) 扶桑略記第三十 承保二年八月十三日条

- (6) 朝野群載卷二法勝寺御塔供養咒願文
- (7) 法勝寺金堂造營記及法勝寺阿弥陀堂造立日時定
- (8) 殿曆康和四年六月廿九日条
- (9) 中右記康和四年七月廿一日条
- (10) 全右 元永元年十一月廿二日条
- (11) 本朝統文粹十二円勝寺供養咒願
- (12) 本朝世紀第三十五久安五年三月八日条
- (13) 愚管抄卷四別帳
- (14) 本朝文集第四十五法成寺金堂供養願文（治安二年七月十四日）
- (15) 釈家官班記下（群従本）

六勝寺の成立について